
居候のわたし

和桜白兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

居候のわたし

【Nコード】

N9391Y

【作者名】

和桜白兎

【あらすじ】

「私」は生まれて死んだ「一生」をいくつも持つ。

今回は平和島少年（長男）の「中」に「居候」！？

十日に一日だけ出てくる「私」は池袋でどう過ごすのか！

答：ダラダラします。

首無しライダーを連れまわしたり素敵で無敵な情報屋に目をつけられたりする「予定」↑これ重要。更新遅いです↑ごめんなさい。原作自体が完結していない為、完結しない可能性大いにあり。短編形式のぶつ切り話になる予定。

原作の雰囲気大切にしたいのですが、知識が伴っていないかったりで捏造、矛盾点など発生するかと思います。閲覧にはご注意ください。

退入院激しい彼と私

かんがえることもやめた

どこまでも闇な黒な赤な青な白な

うまれてきていてひとめぐり

わたしは、だあれ？

これは歪んだ物語。

歪んだのは、なあに？

さて、ひとつ奇妙な話をしよう。

今、「私」は「俺」だ。

前世というものを知ると、誰もがそれをいいことだと錯覚する

しかし、それは違うと私は思う。あくまでも、私の意見だけねど。

たとえば新鮮な気分などあまり味わうこともなかったり

痛みを知っている所為で思い切った行動が洩られたり

変なトラウマがフラッシュバックしたり

ひたすら失ったモノを取り戻す作業は絶望の言葉が大半を占める

何回死を迎えても太陽の光を浴びて生きる日々は続く。

天国への階段も

地獄への門も

私には見つけることができなかった。

目を開ければ新たな始まり。

全く違う世界で、全く同じ、繰り返す。

でも今回は、少し違った。

目が覚めると白い部屋の中で寝間着のような入院服をまとい、足は吊られ、

全身ミイラの如く真白い包帯に包まれていた。

なんとなく予測がついて、はぁ、とひとつため息をついた。

「あなた、また来ちゃったの？」

優しげに聞いてくるのは大人のおねえさん。

ぱりっとした白い服を着こなし赤い縁取りのめがねを掛けたおねえさんはまさに

『できる女』だ。

「……はい。」

それは「彼」にいろいろと問題があるからなのです。

苦笑いしか浮ばない。悪気は無いんです、とフォローを入れたい。

カルテに何かを書き込みながら、聴診器を首から下げたおねえさんは眉をひそめて

ふう、とため息を吐いた。

そうですよねえ、大怪我をして入院してやっと退院した2日後にこんな結果だと

呆れるしかないですよねえ。

私もつられてため息ひとつ。

ちらりと窓ガラスを見ると今の自分の姿が目に入る。

こげ茶色の髪の小さな少年だった。

体中の包帯の白に吞まれ、華奢な体型は強調されてさらに痛々しさを醸し出す。

ベッドには子供でも理解できるように、名前がひらがなで掛かっている。

「へいわじま しずお」

それが少年の名前であり、今の私の名前でもあった。

…今回は3ヶ月ほど入院するらしい。

おとーさんおかーさん、そして可愛い弟よ。

金食い虫でゴメンナサイ。

青い青い空を見上げながら、心の中で両手を合わせた。

なぜ心の中でか、だって？両手は折れて動かせない状況だったからさ！

退入院激しい彼と私（後書き）

突発的にやってしまいました・・・。

誰かに成り代わる小説とか、大好きなんです。

自分で書くとなると絶対原作に沿わないので、十分の一成り代わりで・・・（汗）

本当に自分の書きたいシーンだけ書いて自己満足で終わる可能性大です。

TOV小説を優先させようと思います。これは・・・息抜きです。
息抜きで息が詰まりそうだけどね！

なので更新はいつもよりも遅めになる予定です。

とりあえず書き溜めているネタをちょこちょこ出します。

闇医者少年と彼と私

「しずおくん、今回もすごかったね。」

ふと目を覚ますと黒髪のオトモダチがやって来ていた。

「子犬をいじめる大人たちをやつつける姿はまさに一騎当千！快刀乱麻！」

あ、最後は鮮やかじゃなかったけど。」

ふむ、今回は子犬を助けるが為の乱闘だったらしい。

こついう現状把握にはまるで説明口調のこの少年が役に立つ。

「りょうかい。も、帰っていいよ。しんらくん。」

そう、この少年。

性は岸谷、名は新羅。

なんとなく覚えている。えっと、ブラックジャック的な人だ。

そして彼女一筋。今はそんな自覚はないみたいだけど、無意識なのか、

彼の話題は八割がた『一緒に住んでいるお姉さん』の話になる。

ああそうかい、ひと目見てから限りなく一途なのね。

本当に、この世界はあの「首無しライダー」が住まうあの世界なのだろうか。

興味はあるが、今はこの状況で精一杯だった。

誰かの人生に割り込む状況は、初めてだったから。

生まれたての頃、

ああまだ。またおなじようにはじめからやりなおし

なんて思い、半ば諦めたように日々を過ごした。愛想を振りまく気

力もなくて

ただただ毎日感情をなくして過ごしていた。

しかし

「あれ、今日は静雄くん、元気無いですね。」

「昨日はあんなにはしゃいでたのに」

「何日ごとに、なんだか悟りでも開いたような顔になるのよね。」

「まあ、いつもにぎやかなんだから、たまにはこんなことあってもいいわね」

現在の母親に抱かれ、ご近所様の会話を聞いて、あれ？と思った。

昨日ははしゃいでた？いつもにぎやかか？

よくよく周りを観察してみた。

日めくりカレンダーを毎日確認してみたら、毎日私の認識していた日付と狂う。

その差、約十日ほど。家族が捲る日付を間違えたという訳でもなかった。

何日も、すっかり十日ほどの間隔で時は捲られていたし、

ニュースを見たらいつもしっかりとその日を記録していた。

私はあとの約9日間ほどの出来事を記憶していないのだ。

もうひとりいる。

きっと私は生まれるときになにかをなぜだかまちがえてしまったのだろう。

そしてもうひとりの人格こそが本物だと私は知っている。だから

「・・・・・・・・・・できれば、明日も来て欲しいな。」

だってもう一人の彼は君が来たことを知らないのだから。

闇医者少年と彼と私（後書き）

…そうだ！主人公視点なので平和島少年の出番が無い！！
1 番好きなキャラなのに…（涙）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9391y/>

居候のわたし

2011年11月28日00時50分発行